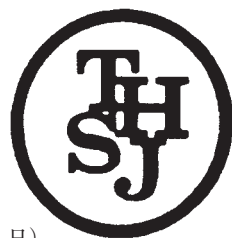


日本ハーディ協会ニュース

NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN



第71号 (2012年4月1日)

発行者 〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

日本女子大学百年館高層棟9階917研究室内 日本ハーディ協会

編集者 〒586-0043 大阪府河内長野市清見台3-9-19 渡 千鶴子

*The pen used (and inscribed) by Hardy for
'Tess of the D'Urbervilles'*



Dorset County Museum/Fotek

提供：C.W.

「トマス・ハーディ全集」完訳本への思い入れ

内 田 能 嗣

そこはかとないうペースとユーモアを漂わせるトマス・ハーディの作品は日本人の気質に合うのか、明治の昔から愛読されてきた。ハーディの訳本は文庫本になるくらいに人気があるのに、未だ全集の完訳本は刊行されていなかった。もう20年以上も昔のことになるが、後藤義之進先生と吉川道夫先生、それに私の恩師内多毅先生と私は東京のある料亭で会食をしたことがあった。当時、千城からハーディの訳本が何冊か出版され、私も上山泰先生と共訳で『貴婦人の群れ』を上梓してまもない頃のことであった。会食中に後藤先生は何気なく、千城の単発的なハーディの訳本も結構なことだが、そろそろハーディ全集の完訳本が刊行されてもいい頃だと言われた。内多先生も後藤先生の御意見に同調された。『イギリス小説の社会的成立』（研究社）の名著で著名であり、ヘンリー・フィールディングの御研究で京都大学の博士号を取得されていた内多先生は「私自身はハーディを研究してはいないが、父が研究していたのでハーディ全集が出版されることになれば私も嬉しい。それだけでなく日本のハーディ研究にも貢献することになると思うので、ぜひ刊行してほしい。」と言われた。昭和初期に出版された『薄命のヂュード』の訳者内多精一先生は実は内多毅先生の岳父であられたのだ。後藤先生と内多先生にくらべると、吉川先生も私も若くて、親子ほどの年の差があったので、二人の老先生は吉川先生と私にハーディ全集の完訳本刊行の望みを託したのだと思われた。必ずやりとげますと吉川先生も私も誓言したのを覚えてる。

それからしばしば吉川先生の成城の御宅にお邪魔してハーディ全集のことを話し合った。その頃は大学もまだ文学離れをしていなくて英文学科隆盛の時期であった。しかし個人の、しかも外国の作家の訳本全集の出版となると出版社は二の足を踏むのであった。

私は創元社から何冊か出版していた。たとえば、内多毅監修、杉本龍太郎・深沢俊・内田能嗣編『愛と死—エロスのゆくえ』など。創元社とはかなり親しくしていて、それまで私が持ち込ん

だ企画はすべて受け入れられた。谷崎潤一郎や芥川龍之介などの全集や作品集を刊行したことがある大阪最大の出版社である創元社ならハーディ全集も引き受けてくれると思っていたが、外国の個人の作家の全集は採算が合わないといって断られた。そこで私は、内多毅監修、杉本龍太郎・深沢俊・内田能嗣編『イギリス文学展望—ルネサンスから現代まで』を刊行したことのある京都の山口書店と交渉した。三宮庄二社長は二つ返事で引き受けてくれ、吉川先生も私も大喜びで三宮社長と会って三人で話し合った。それから一年も経たないうちに、三宮社長が個人的事情で山口書店を退職することになり、この話も御破算になった。そうこうしているうちに、いたずらに年月は過ぎ去り、後藤先生も内多先生も御他界された。そのうえ、肝心かなめの吉川先生まで、働き盛りで中央大学教授という現役でありながら心臓発作で倒れ鬼籍に入られた。

私としては、ハーディ全集の刊行は今は故人となられた三先生の遺訓だと肝に銘じた。こうなったら大阪教育図書の横山哲彌社長に頼み込むしかないと思った。大阪教育図書はスタインベック全集を完成して、ギャスケル全集を刊行中であった。そこでギャスケル全集が完成した段階で私は横山社長に相談した。二つの全集を刊行した実績のある横山社長は好意的であった。

ハーディ協会の鮎澤乗光会長と深沢俊顧問に相談して2003年の秋、学習院大学で催されたハーディ大会の運営委員会でハーディ全集刊行を議題にとり上げた。その結果、協会の仕事とするよりも、何人かが相談して監修者、編集者、訳者を随意に決めた方がいいのではないかということになり、現状の陣営になった。

二つの全集刊行の実績をもつ大阪教育図書は、迅速な仕事ぶりで全16巻19冊のトマス・ハーディ全集の初回配本は2009年春と決まった。予定通り2009年の春に土屋俊子訳『青い瞳』、塩谷清人訳『塔の上の二人』が、秋には大槻茂行訳『エセルバータの手』、福岡忠雄訳『窮余の策』が、2010年の春に鮎澤乗光訳『キャスタブリッジの町長』、森松健介訳『詩集Ⅱ』が、2011年の春に高桑美子訳『ダーバヴィル家のテスト』、内田能嗣・押本年眞・前田淑江・渡千鶴子・森松健介他訳『詩集Ⅰ』が、秋には井出弘之・永松京子・清水伊津代・並木幸充訳『トマス・ハーディの生涯』、藤田繁訳『日陰者ジュード』が出版された。今春には深沢俊訳『帰郷』、森松健介訳『霸王たちⅠ』が出るようになっており、2年後には全16巻・19冊完成の予定である。

後藤先生、内多先生、吉川先生との約束が果たせそうで、草葉の陰で三先生も御喜びになっていると思うと私としてはほっとしている。

墓場の恋人たち

海 老 根 宏

『青い瞳』はテニソン、コヴェントリー・パトモア、それにブルーストのお気に入りの小説だったそうである。私もこの小説が好きで、ハーディのもっとも詩的な作品ではないかと思っている。詩的といってもいろいろの意味があるだろうが、ここでは物語と背景となる土地とが溶け合って一つになっているという意味である。『テスト』や『帰郷』などの自然描写にはもっと哲学的な意味の重みがこめられているが、この作品で描かれるコーンウォールの、地の果てのような海と断崖の風景には、すぐれた旅行記のような新鮮で軽やかな感覚がある。

この小説がハーディとエマとの現実の出会いと恋に基づいていることを私たちが知っているために、ますますそう思えるのかもしれない。実際、この小説の情景に、ハーディの伝記的事実を重ねあわせずにいることは難しい。だがその一方、現実には成就した二人の恋をベースとしたこの小説が悲劇に終わり、またこの物語のなかで、恋と墓場とがまるで切り離せないもののようになり、絡みあって描かれているのは何故だろうか。

前半の恋人役スティーヴン・スミスは、月光の教会墓地でエルフリードとデートする。花壇やイトスギの木立ちで人工的な喪の気分を演出する都会の墓地とは反対に、何の手入れもされず、自然の草原が海に向かって広がっているだけの墓地である。彼は何気なく墓石の一つに腰を下ろし、エルフリードにも座るように言う。一瞬ためらったのち並んで腰を下ろした彼女に、彼は多くの前にも恋人はいたの、と訊ねる。彼女は一人だけ、向こうから一方的に好きになった人がいたわ、と答える。

「その男はどこにいるんです」

「ここよ」

「ここ！どういう意味ですか」

「ここにいるのよ」

「このどこに」

「私たちの下。このお墓のなかにいるのよ」

この男はエルフリードに相手にされずにいるうちに死んでしまったのだという。スティーヴンと同様、私たちもすっかり仰天してしまう。生と死とが、なんと無造作に並列されていることだろう。

後半になると、エルフリードの新しい恋人ヘンリー・ナイトが、今度も気の進まない彼女を連れてラクセリアン男爵家の地下納骨堂に降りる。最近若くして亡くなった男爵夫人の柩を納める作業をしている最中で、入り口が開いていたのだ。石工たちといっしょにスティーヴンがいるが、ナイトはまだ、彼がエルフリードの以前の恋人だとは知らない。ぎごちない会話を交わしたのち彼はふと思出したかのように、これは多くの婚約者ミス・スワンコートだと紹介し、当人たちは自分らの以前の関係についてはおくびにも出さない。生と死の不思議な対照と親近性が、印象深く描かれている。そして物語の結末では、ナイトとスティーヴンは、エルフリードの棺を載せた貨車といっしょに、汽車の旅をすることになる。

ハーディがエマの死後、コーンウォールの風景のなかに、いかに亡き妻の幻を追い求めたかを知る私たちには、これらの墓場の場面はどうしても予言的に感じられる。髪を海風になびかせてポニーを走らせるエルフリードの姿は、「1912-13年詩篇」の「旅立ち」で、「ビーニィ断崖ぞいに馬にまたがり・・・じっと私を見た、あの白鳥のようなうなじの女」に重なり、父牧師の馬車からまずエルフリード、ついでスティーヴンが降り、馬を楽にして坂道を登る場面は、「カースル・ボテレルにて」で軽二輪馬車を降りて坂道を登る、「私自身と一人の娘」の幻影のなかに再現される。まるでこの小説の全体が、「1912-13年詩篇」で老詩人ハーディに現れた過去の幻そのものであったかのようにである。すると愛と死とのこの絡みあいもまた、40年後に訪れたことの予兆だったのか。まるで「両者の邂逅」でタイタニック号と氷山とが、ずっと以前から出会うべき経路に乗っていたように。

エマを追悼する詩篇を読むことで、この物語の痛々しさがよりいっそう強く感じられるのだから、このようなハーディ好みの「空想」にもある程度の裏づけがあるとも言えるだろう。しかしハーディはまた、自らの小説を材料にして詩を書いてもいる。「テスの嘆き」、『ジュード』の不幸な少年を描いた「深夜の大西部鉄道列車」、『森林地の人々』のマーティの独白である「松苗を植える人たち」など。「夢か否か」のなかでハーディは、かつての美しかったエマはおろか、セント・ジュリオットやビーニィの断崖さえも実在したのではなく、自分の美しい夢だったのではないかと疑っている。彼にとって、自分がかつて書いた物語は、もしかするとかつて自分が生きた人生と同じくらい現実のものであり、これらの詩篇も少なくとも部分的には、『青い瞳』を予言として成就させるために書かれたのかかもしれないと思えるのである。

荒野に寄せて—ムアとエグドン・ヒース

廣 野 由美子

イギリス小説で有名な荒野といえば、エミリー・ブロンテのムアと、ハーディのエグドン・ヒースが、まず思い浮かぶ。これらを舞台とした作品『嵐が丘』(1847)と『帰郷』(1878)において、荒野がいかに描かれているかについては、それぞれ様々な論考があるが、ここで両者の比較を試みてみたい。

舞台の位置は、『嵐が丘』ではイングランド北東部のヨークシャー、『帰郷』では南部のドーセット近辺に定められているが、ヒースが群生した広大な荒地のイメージは、ともに作者が子供のころから慣れ親しんだ原風景から発展したものと言ってよいだろう。それは作品の中心部を占め、物語世界で象徴的な役割を果たす重要な要素であるという点で共通する。

しかし、荒野の扱われ方は、両作品ではかなり異なる。ハーディの語り手は、エグドンの外観を克明に観察するのみならず、あたかも登場人物のひとりであるかのように擬人化し、その姿を様々な角度から描き出す。荒野は、ユーステイシアが篝火を焚いてワイルディーヴを呼び寄せる場面、紅殻を商うディッゴリー・ヴェンが出没する場面、絶望したヨーブライト夫人が毒蛇に噛まれる場面、目を患ったクリムがエニシダを刈って働く場面、そしてユーステイシアが嵐のなか川に身投げする場面等々、まさに主要なドラマが展開する現場でもある。

それに対して、『嵐が丘』のムアは、物語中の場面として実際に描かれることはほとんどない。第二世代のキャサリンが、屋敷の近くで嵐が丘の住人と対面するわずかな場面を除くと、大部分のドラマは屋内で展開している。ムアは、ロックウッドが発見した25年前のキャサリンの日記の余白や、錯乱状態になったキャサリンが、枕の中から引っ張り出した鳥の羽を並べて口走る妄想のなかで、あるいは、窓辺から聞こえる川音などを通して、間接的に提示されるにすぎない。荒野は、いわばテキストの行間から浮かび上がってきて、読者の空想のなかで確固たるイメージを形成していると言えよう。

第二に相違が目立つのは、荒野と人物との関係である。我儘な悲劇のヒロインたちは、荒野を正反対のものとして捉えている。キャサリンにとってのムアは、自分の存在に不可欠の要素で、「天国」でもある。ともにムアで育ったヒースクリフは、その名(ヒース／崖)のとおり、キャサリンにとっては荒々しい自然そのものの存在であり、物語の結末では、現世で引き離された二人の魂が、死後結びついてムアを彷徨っていることが暗示される。他方、ユーステイシアにとってエグドンは、自分の生を阻む「牢獄」であり、「地獄」のように感じられる。彼女は、パリから帰郷したクリムと結婚すれば、華やかな都会へと脱出できると幻想するが、故郷を愛する夫との決裂によって挫折し、破滅的な死に至る。

最後に、両作品における荒野の象徴的な意味について比較しておこう。『嵐が丘』は、『帰郷』のように男女の性愛を描いた作品ではない。野生で育ったヒースクリフとキャサリンは、シュラスクロス・グレンジという文明世界と出会ったことをきっかけに分裂したのち、どこまでも子供の原理を貫いて、原始へと回帰し、永遠の結びつきを獲得しようとする——これは、いわば成長を拒んだ永遠の子供の物語だとも言える。キャサリンにとっては肉体こそが「牢獄」であり、彼女はそこから脱出して、ヒースクリフとともに荒野の王国へ入って行くことを希求する。したがって、ムアは冥界への入口を含んだ四次元的世界でもあるわけだ。この点で、『嵐が丘』はリアリズム小説の枠組みのなかに、ファンタジー性を——「神話」をファンタジーの原始的形態であると捉えるなら、神話性を——内包しているのである。

一方、タイタンやプロメテウス等の比喩が豊かに織り込まれた『帰郷』が、神話的イメージの

濃厚な作品であることは言うまでもない。エグドンは、時の流れに影響されることのない悠久の大自然の姿を現わす。そこは、人間が人為的に作ったいかなる文化の侵入をも拒み、容赦なく人間に従属を受け入れさせる場所である。つまりエグドンは、人間にとって抗しがたい存在を象徴している。太古における人間と自然の関係を保ち続けているという意味で、それは神話性を帯びているのである。

したがって、エグドンが反逆者ユーステイシアにとって「地獄」であると語られるとき、それは、『嵐が丘』のムアが天国に通じているという意味での「冥界」とは次元が違う。ハーディの荒野には、もっと人間臭い一面がある。それは人間の顔に譬えられたり、人間の性格と比較されたりさえする。永遠の時を刻みつつも、エグドンはあくまでも隅々まで三次元空間から成り立っているのだ。物語の最初にユーステイシアが、そして結末でクリムがヒースの頂上に立っている遠景は、塚の一部が出っ張っているように描かれる。つまり、突起した人影は、荒野と物理的に連続しているのである。たとえ村人たちの間で迷信が飛び交うことはあっても、エグドン・ヒースは、決して『嵐が丘』のように亡霊が彷徨う世界ではない。

ハーディと私 その後

「アリシアの日記」の舞台

ール・アーヴル、パリそしてヴェネチアー

小林 千 春

小説というものは不思議なものだ。学生の頃に読んだ時、その後10年経って読んだ時、と同じ作品を読んでいるはずなのに、全く違う印象を受けることがしばしばある。理解出来なかったことが、理解出来るようになったり、見えなかったことが見えてきたり、かつて感じなかったことを感じたりする。ハーディの小説に出会ってからこのようなことを思うようになった。大学院で最初に読んだ『ジュード』の鮮烈な印象は未だ忘れられないが、何度も何度も読み返すと違う味わいが出てくる。小説は自分の人生と重ね合わせて読むものなのかもしれない。

教壇に立ち始めてまだ日も浅い頃、母校での授業に「アリシアの日記」を選んだ。数多あるハーディの作品からなぜこの小説を選んだかという、テーマが若い女性の恋愛であること、ハーディ作品の中で唯一の日記形態をとった小説であることから、若い女子学生たちが興味を抱きそうだったからだ。担当したクラスに姉妹がいる学生も多く、当時はブログなどもなかったから、日記をつけている学生もかなりいて、「英語は難しかったが、内容が面白かった。姉(妹)がいるので、共感できることがあった。」などというコメントをもらったことを覚えている。

「アリシアの日記」は、ハーディが1887年の3月から1ヶ月間、夫人を伴いフランスからイタ



リアルト橋から大運河を望む（撮影：筆者）

リアに旅行した時のことをモチーフとして書かれた小説である。ハーディ作品の中で唯一の日記形態をとっており、ストーリーの舞台がイギリス以外の国であるという点で特異な小説である。

「アリシアの日記」の中で、「住んでみたら、パリにも“seamy side”があるのに気がつくのだろうけれど・・・」という件(くだり)がある。アリシアが妹のキャロラインからの手紙がパリのきらびやかな面にだけ目が眩んでいる、と妹の幼さを

批判的に記している箇所である。いつもは自分が旅行に行き、妹は留守番役だったのに自分が留守番役になり面白くない。といった本音を「妹を心配する気持ち」にすり替え日記に綴っているのがひそかに読みとれる。‘seamy side’という言葉に奇妙な引っかかりを覚え、『ハーディ協会会報 20号』に拙論を執筆させて戴いたこともあった。今回改めてこの作品を読み直してみると、物語の冒頭から表面的に描かれているアリシアの妹への愛情の‘seamy side’が鮮明に浮かび上がってきた。日記という自分のために綴るものを覗き見しながら、アリシアの心のまさに‘seamy side’を読むという後ろめたい愉しみをぞくぞくしながら感じる事ができた。

高校時代に第二外国語でフランス語の授業を受けたが、なぜか好きになれず、大学時代はスペイン語を履修した。そのせいか、ヨーロッパに行くチャンスは何度かあったが、フランスだけは避けていた。が、ここ数年、家族の事情で年に数回パリに行かなければならなくなった。この作品のことが脳裏をかすめ、二つのことが心に浮かんた。一つは、アリシアの父が危篤の妻を見舞うために着いた港町、ル・アーブルを見てみたいと思った。もう一つは、パリの‘seamy side’を覗きたいということだった。幸いノルマンディーに旅行する途中で、ル・アーブルを訪れるチャンスがあった。勿論当時の面影は残っていないが、イギリス海峡を望む港の風景を見ることが出来た。パリに関しては、街自体が美術館のように美しく、建物すべてが芸術作品に見えた。ただ、シャンゼリゼ通りに代表されるきらびやかなパリの街も、サンジェルマン・デプレのブランジェリーを一步出たところで、ジブシーたちによる観光客をねらったすり行為が横行し、凱旋門を超えた交差点で信号待ちしていると、フロントガラスにお金をせびる子供が張り付く光景など、他の大都市同様の‘seamy side’も目の当たりにした。

一昨年暮、パリからヴェネチアに旅した。小説では4月の設定だったが、新年をヴェネチアで迎えた。シャルルが泊まっていたとされる、「スキアヴォウニ河岸」のそばのホテルのつに泊まり、ゴンドラにのり、「リアルト橋」「嘆きの橋」を見た。「グリマーニ宮殿」を眺め「フラリー教会」で祈った。街を歩きながらアリシアの気持ちを想った。不思議に初めて来たような気がしなかった。小説の中に描写されているように、ヴェネチアは、まさに「コルクで出来た街が穏やかな青い海に浮かんでいる筏のように」見えた。この透き通る碧い海の光景は、紛れもなく美しかったが、高い塀で仕切られたラビリンスのような小道で窒息しそうになった時、なぜかハーディが示唆したヴェネチアの‘decay’を肌で感じた。穏やかな澄み切った青の風景と灰色の狭い迷路のコントラストは、私の知る世界のどの街とも異なっており強烈な印象を残した。

確かに初めて来た場所のはずなのに、前にも来たような錯覚に陥ることがたまにある。日本国内でも何回かそんな気持ちになったし、大学時代に初めて訪れた異国の地、イギリスでも同じような気持ちになった。ハーディの作品に触れることが出来て、目に映る旅の風景も深みを増した。本物の小説というものは、私たちの人生を深く豊かにするものだとし強く感じ、この思いを学生たちに伝えていきたいと思っている。今、再びハーディの小説と出会えたことに、出会いを与えてくれた恩師の方々に心から感謝している。

ハーディと私

山内政樹

この度、「協会ニュース」に記事を書かせていただくという思いがけない機会をいただき光栄に思うと同時に、執筆にあたって、過去の「協会ニュース」を読み直すと不安な気持ちでいっぱいです。私個人は決して文学好きな学生ではありませんでした。中学・高校と小説すら手にしたこともなく、大学ではレポート提出のためにやむなく数冊小説を読んだ程度で、文学とのつなが

りが希薄な学生生活を過ごしてきました。また、米文学ではなく英文学を選んだのも、イギリスがサッカーとビートルズを生んだ国という安易な理由からです。何となく入ってしまった英文学科で、何もわからないまま書いた卒業論文はゼミで読んだ『テス』を扱いました。その際、ハーディのほかの小説に目を通すことなく、卒業論文を提出するという今では考えられない暴挙を平気で行っていました。修士論文は、学部時代に読んだ数少ない小説の1つであるオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』を扱い、本格的にハーディ作品に向き合ったのは博士課程後期からで、まだ10年にも満たないような状態です。

大学院に進学したものの、何をしたらいいのかわからず、ただひたすらこれまでの遅れを取り戻そうとヴィクトリア朝の作品を読みふける日々を過ごしていました。ハーディに関しては、運悪く小説よりも先に『日陰のふたり』のビデオを見て、この救いようのない絶望的な世界観や終始陰気な映像に嫌気がさし、あえて避けていました。オースティン、ブロンテ姉妹、メレディス、ジョージ・エリオット、ディッケンズ、ウィルキー・コリンズなどの作品を読んではみたものの、作品の面白さや趣といったものがわからず、「長い年月をかけてこの作家の研究をする」という出会いはありませんでした。研究するということは、好きなものをより正確に理解しようとする気持ちがないと続かないものです。当時の私にはその研究対象が見つかりませんでした。作品を読めば読むほど、理解するどころか、わからないことがどんどん増えていきました。例えば、『キャスターブリッジの町長』の冒頭場面での妻売りやスキミントンなどの慣例についての歴史的知識です。妻売りは19世紀では道徳的に問題のある行為ですが、下層階級の世界では一般的に行われていたという歴史的背景など、知らないことが増えるばかりで、本当の意味での作品のクロス・リーディングはできないことを痛感しました。残念ながら、今でもそう感じています。まったくの余談ですが、昨年4月、住み慣れた大阪から関東に引っ越して、言葉にしにくい違和感のようなものを感じています。同じ日本であっても言葉や文化の微妙な違いを実感しています。もちろん大阪が特殊な土地柄であることは理解していますが。それよりも離れた土地で、異なる言葉と文化、歴史を持った国で書かれた小説を本当に理解できるのかどうか、その不安な気持ちが、作品を味わうよりも強く心に残っています。

さて、ハーディ作品を研究対象に決めたきっかけは、ハーディ作品を論じる評論文の面白さによるものでした。上述しましたように、作品そのものを理解するには、膨大な知識が必要であることや英語のニュアンスを理解することが必要不可欠であると感じ、良くも悪くも、作品そのものの良し悪し、好き嫌いは気にせずに開き直ることにしました。ヴィクトリア朝作家の作品、それぞれの評論文を読み比べて、一番面白いと感じ、幅広い論が展開されているのがハーディ作品に対する評論でした。ペニー・プーメラ、ダグラス・ブラウン、サイモン・ギャトレル、ジョン・グッド、イアン・グレガー、マージョリー・ガーソンなど様々な評論家が様々な手法で作品を分析していました。今でも階級や結婚制度の問題、都市と田舎、身体論など多岐にわたる分析方法に魅力を感じたことを覚えています。また、ほかの作家の作品ではあまり深く論じられない、性を挟んだ男と女の関係について論じているものがハーディの作品論で多く見られたことも、ハーディを読み続ける原動力になっています。いつか、これらの評論家と肩を並べるような研究をしたい、というのがハーディ作品を読み続けるきっかけでした。

ハーディ研究を始めてまだ間もない私ですが、多くの先生方のご指導・ご鞭撻により、徐々にハーディ作品との距離が近づいているように感じています。ハーディ作品の魅力については少しずつ理解できているつもりではありますが、今でもやはりハーディ作品の魅力を十分に引き出してくれる評論文の方に魅力を感じてしまいます。これは私の研究不足によるものではありますが、評論家を挟んだハーディと私の関係は今後も続いていくと思います。

2011.3.11の震災を振り返って

市 原 聡 子

あれから早1年が経とうとしています。ちょうど後期入試の前日でした。経験したことがない程の長い大きな揺れ、それに伴う停電、通信手段の断絶、そして寒い中での不安と混乱。津波とは無縁の弘前市にも、大きな影響がありました。被害の大きさについてはラジオの情報だけでは掴めず、車のテレビで初めて見て衝撃を受けました。停電は丸1日続き、後期入試は中止となりましたが、交通機関が麻痺しているため、遠方からの受験生には帰る手段がなく、大学として急遽、宿泊施設を確保し提供しました。中には自宅が倒壊したり、津波で流されたりして帰る家が無くなり、かなり長く逗留する例もありました。電気が復旧するとすぐに、春休み中の学生の安否確認を始めましたが、ガソリンが手に入らないため通勤に難儀し、また灯油の不足から、大学の暖房はストップしたままで、研究室ではガスストーブで凌ぎました。

神戸の震災に遭われた方々が経験されたように、寒い時期の災害は特に厳しく感じられます。私は1978年の宮城県沖地震も体験していますが、あの時は暖かい時期でしたから、寒さという二重苦はありませんでした。また、ビルの倒壊など、地震の被害は大きかったものの、津波の被害はあまりなかったように記憶しています。幸い、仙台の実家は今回の地震でも被害はなく、ガスの無い生活が長く続いたことと、生活物資の不足だけで済みましたが、知人の中には、家が倒壊したり、津波で流されたり、ご家族を亡くされた方もおられました。生活物資を送りたくても宅配手段は使えず、高速道路も閉鎖されており、漸く仙台に物資を届けることができたのは、震災から3週間後でした。高速道路はすでに1週間前に開通していたにも拘わらず、波打ち、段差もあって、スピードを出せない状況でした。この1年で復興が進んだ所と、手の施しようもなく戦場跡のような様子を呈している所があります。被災地に残るのか、他の地に移り住むのか、難しい問題は今なお続いています。

震災直後の日本人の冷静さ、秩序を重んじる態度は海外で話題になったようですが、それは自然の厳しさに直面してきたことにもよるのかもしれませんが。東北の冬は厳しく、夏でも太平洋側は山背で冷害が起きます。宇宙に盲目意志のようなものがあるとなかろうと、人間にはどうすることもできないことを思い知らされます。自然の全てを受け入れるしかありません。弘前も今冬は真冬日が多く、いつにない豪雪で雪かきに明け暮れました。そのような早朝には近所の人たちが出てきて挨拶を交わした後、黙々と雪かきをします。雪を積み上げる所も無くなって途方に暮れながらも、仕方がないというように。こうしてただ春の訪れを待つしかありません。

震災後、絆という言葉が頻繁に目にするようになりました。多くの死を目の当たりにし、命のはかなさを実感したことによるのでしょうか、自然の厳しい地域での暮らしにおいては、当たり前のことではないのでしょうか。それは人間に限ったものではなく、生きとし生けるものへの共感であり、一方的なものではなく、双方向のもののように感じます。ここでHardyと結びつけるのは、いかにもこじつけのように見えるかもしれませんが、自然の娘としてのテスが、断末魔の雉たちの首をひねる場面で指摘されるloving kindnessは、人間の中にある自然に対する双方向的共感と類似するのかもしれませんが。

第54回大会印象記

麻 昌 徳 子

日本ハーディ協会第54回大会は、2011年10月29日（土）、永松京子氏のお世話により、中央大学多摩キャンパス1号館1406会議室で開催された。大会当日は天候に恵まれ、秋晴れの清々しい一日となった。大会会場では、開催校である中央大学の保有する貴重な蔵書「ハーディ・コレクション」が一部展示され、協会会員の注目を集めていた。開会の挨拶を同大学文学部長である河西良治氏が述べられ、それから午前の部の研究発表が始まった。

午前の部前半は、小林千春氏が司会を務められ、鈴木淳氏と福原俊平氏が発表を行なった。鈴木氏は「ハーディのミソジニー—ニューウーマン小説への反応として『ジュード』を読む—」というタイトルで、1880～90年代に流行したニューウーマン小説にみられる作家の主張と、それへの反応としての『ジュード』におけるハーディの見解との相違を検証された。鈴木氏は、結婚と性病という問題がどう扱われているのかを、ニューウーマン小説の代表的作家Sarah Grandの作品と『ジュード』に辿ったうえで、中産階級女性の性道德を強化することがその問題解決の鍵となると主張する前者にたいして、後者には、むしろそのような主張を疑問視する点があることを指摘された。そして鈴木氏は、作中ジュードがアラベラの過去を知らずに性病の被害を受けた可能性が暗示されており、そのような災いを男性にもたらす「新しい堕ちた女」の脅威が大英帝国の威信をゆるがす将来への不安として解釈される、と結論づけられた。

つづいて福原俊平氏は「動物との共感—ハーディ小説と動物愛護思想」というタイトルのもと、1824年に創設されたSPCA（動物愛護協会）に代表される動物愛護思想が、ハーディ小説においてどのように示されているかを、『テス』と『ジュード』を中心に考察された。福原氏は、従来からしばしば指摘されるダーウィニズムのハーディ作品への影響が、動物愛護思想においても見うけられることを指摘した。それは、進化という観点からみれば動物と人間は一体である一方で、自然淘汰という観点からみれば自然は人間の現実には残酷なまでに無関心であるという、ハーディの一見矛盾した自然観に表れているという。そのうえで福原氏は、動物愛護思想が都市部から発展した文明化の度合いを示すものであったのに対して、農村出身のハーディは自然の厳しさを理解しているという点で異なっており、そのためハーディ作品では、社会的に虐げられる階級に属する登場人物らが動物の痛みにより自己を投影して高い共感を示すという行為が、知的中産階級読者層の同情を獲得することによって、メタレベルでの社会秩序の転覆を可能にすると主張された。

午前の部後半は、金子幸男氏に司会が引き継がれて、服部美樹氏と伊藤佳子氏が発表を行なった。服部氏は「『日蔭者ジュード』における「汚れ」」というタイトルで、従来から読者の読み方ひとつで相反するジャンルに分類される『ジュード』という作品がもつ曖昧さを、「汚れ（よごれ）」というモチーフに注目することによって明らかにする試みをされた。まず、創作当初から「汚れ」は作品のアイディアを具現化するうえで重要なモチーフであったことを確認したうえで、服部氏は、作中ジュードやスーが汚れに対して潔癖なまでの拒絶反応を示している点を例証し、また彼らが希望を打ち砕かれるという試練にあった際には、自分が一時的に汚されたという汚れのメタファーで経験認識を促している点にも注目された。そして服部氏は、この汚れにたいする両義的かつ曖昧な態度において、汚れを否定的に捉えるだけではない反規範的な契機が隠されている、と結論づけられた。

最後に、伊藤佳子氏が「『森林地の人びと』における階級移動—グレイスの結婚」というタイトルのもと、都会で教養を身につけた田舎娘グレイスが、ジャイルズではなくフィッツピアーズ

と結婚し、その後も両価値体系のあいだで自己の価値判断を迷いながらも、最終的には後者との夫婦生活で前向きな選択をすることの作品上の意義を考察された。伊藤氏は、フィッツピアーズと結婚した後もジャイルズや彼の帰属する共同体がもつ田園的な素朴さに惹かれ、回帰を願うグレイスの心境を辿ると同時に、都会で身につけた教育が彼女に疎外感を抱かせている場面を取り上げて、グレイスの感情生活において価値観の変化が起こっていることを指摘した。その過程で精神的成長を果たした結果、グレイスは教養を分かち合えるフィッツピアーズとの新たな出発を人生で初めて主体的に選択したとして、伊藤氏はこの結末を肯定的に評価された。

計4名の研究発表が全て終了し、昼休憩をはさんで午後の部となった。午後の部では、総会における諸報告がなされた後、2011年6月9日～12日にYale大学で開催された「Hardy at Yale II」に参加された井上澄子氏による、写真を交えた詳細な大会報告が行われた。

その後、「“Impression” から読み解くハーディ」と題したシンポジウムが行われた。司会と講師を金谷益道氏が兼任され、高橋路子氏と石井有希子氏が講師として登壇された。まず、金谷氏がシンポジウムのタイトルに挙げられている“Impression”という用語について、ハーディが『テス』第五版の序文で述べた“a novel is an impression, not an argument”という発言に基づいた、彼の創作理念を端的に言い表したものであることを確認された。そして、この理念を議論の中心に据えて、始めに金谷氏は、多くの批評家によってこの言葉がリアリズム小説からの脱却を図るモダニズム小説の先駆的存在として見なされてきたことを踏まえて、ハーディ自身による断片的な論考においては、実際どのような意味をもっていたのかを検討した。金谷氏は、ハーディが当時支配的であった特定の創作理念—自然主義やロマンティズム—を支持するのではなく、自然主義的な再現を目指すとともにロマン主義的な知覚主体の想像力を重視する向きを持ち合わせており、そうした一見矛盾する指向性を両立するための方策として、“Impression”という言葉を持ち出したように思われると述べた。そして、その用語で自らの創作理念を打ち立てることにより、直接的な再現とそれを媒介する知覚主体の存在を是認させ、2元論のいずれかを選択するのではなくむしろ融合する芸術論を目指したのではないかと考察された。

次に、高橋路子氏は、モダニズム小説の旗手として名高いヴァージニア・ウルフが、ハーディの述べた「小説とは“Impression”である」という言葉に賛同していたことに注目され、ウルフ自身がなぜそれに共感し、どう自らの創作において実践していったのかを検討された。高橋氏は、ウルフが写実や模倣を志向するリアリズム小説からの脱却と新しい小説の模索をしていたことを検証されたうえで、1928年に発表されたハーディ論においては、印象を重視するハーディの創作理念を理想的なものとして見ていたことを指摘した。ウルフにとって、小説とは人間の内面や意識を重点的に描いたものであり、それを描くためには、写実的な模倣ではなく、複数の登場人物による、ときには偏った印象の断片的な記録がなされなければならない。そして、印象の断片的な羅列を全体として振り返ったとき、そこにはパターンが生まれていなければならない。高橋氏は、ウルフがそのような創作理念に基づいたものとしてハーディの作品を解釈していたのではないかと述べられた。

最後に、石井有希子氏は、ハーディの唯一の少年向け小説*Our Exploits at West Poley* (1892)を考察対象として、“Impression”という言葉の語源にある「刻印する」という行為が、作中にアナログ的に描かれているかを考察された。石井氏は、作品成立の背景として、1870年代のヘンリー・M・スタンレーによるナイル川の水源探索があることを指摘し、おそらくそこから想起されたであろう本作品が、同じように少年スティーブが洞窟を探検して水源地を見つけ出すという展開を見せている点に注目した。そして、1870年代に「土地法」改正をめぐる議論が持ち上がっていたのと同様に、この作品でも水源が発見された後の騒動をつうじて、村の秩序を取り戻すために法を制定するような「刻印」行為が描かれていると述べられた。さらに石井氏は、そ

うした描写をつうじて読者にスティーブという人物の「印象」を残しているという点において、この作品が語源的な意味での“Impression”として重層的に構成されている、と結論づけられた。

シンポジウムの後、福岡忠雄氏の司会のもと、森松健介氏による特別講演「ハーディとイギリス・ロマン派」が行われた。森松氏は、以前よりハーディの反ロマン派的認識について考察されてきたが、今回の講演ではむしろ、ハーディがロマン派詩人から何を積極的に受容してきたかについて注目され、詩のみならず小説や詩劇まで含めてそれを検討された。森松氏は、ロマン派詩人が異種言説を混交し自らの主張と対話させながら弁証法的に作品を創作するという特徴をもっていたと述べられ、そうした特徴を継承したハーディが、ロマン派の言説を引きながら自らの時代的現実には則して問い直しを図るという立場で創作していたことを指摘された。また、作品は価値観の表明であるとするロマン派詩観や、ロマン派の大きなテーマであった捨て子や農村の貧困の問題、ヴィクトリア朝の処女信仰に対する諸謔精神や戦争批判など、ハーディ作品の思想的な側面にも色濃くその伝統が引き継がれていることを、森松氏は具体的な作品記述を挙げながら検証された。また、講演中にはバイロンの物語詩「海賊」のパレエ版を鑑賞する機会も設けられた。

すべてのプログラムが終了し、玉井暉会長の閉会の辞でもって大会が閉じられた後、同大学1410会議室に場を移して、懇親会が和やかに行われた。ここで改めて、円滑な大会運営をお世話してくださった中央大学や協会事務局の皆さま方に、心よりお礼を申し上げたい。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年間費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけると幸いです。なお、顧問の先生は、一般会費のお支払いは不要です。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120 - 5 - 95275です。会費は、郵便局からお振込みください。同封の振替用紙をご利用の場合は、手数料をお支払いいただく必要はありません。

次回大会について（研究発表募集）

次回第55回大会は、今年の10月13日(土)に、武庫川女子大学（兵庫県西宮池開町6-46、中央キャンパス）で開催されます。昨年度の大会の役員会、総会では、今年度の大会の開催日は10月27日（土）を予定していると発表いたしました。が、開催校の都合により開催日を変更されましたので、ご注意のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

研究発表にご応募の方は6月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150字程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三つを添えて、協会事務局までお申し込みください。発表時間は25分で、ほかに5分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演は高橋和久先生（東京大学文学部教授）がお引き受け下さいました。シンポジウムは、廣野由美子先生（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）が中心になってテーマ等を検討中ですので、その詳細は次号の協会ニュースでお知らせいたします。特別講演とシンポジウムでは大変魅力的なお話がうかがえるものと存じます。会員の皆さまとともに楽しみにしてお待ちいたしたいと存じます。

《内外ニュース》

会員による研究書・翻訳書：

藤田繁訳 第13巻 『日陰者ジュード』（大阪教育図書、2011年9月）

井出弘之・永松京子・清水伊津代・並木幸充訳 第16巻 『トマス・ハーディの生涯』（大阪教育図書、2011年9月）

金谷益道他4名編訳 『クリス・ボルディック選 ゴシック短篇小説集』（春風社、2012年2月）
「グリープ家のバーバラ」所収。

深澤俊訳 第6巻 『帰郷』（大阪教育図書、2012年3月）

森松健介訳 第14-1巻 『覇王たち I』（大阪教育図書、2012年3月）

小説：

今夏（8月18日～26日）The Twentieth International Thomas Hardy Conference and Festival
で、発表予定のPeter Tait氏の小説の紹介が、Anthony Head氏（東京在住）からあった。

Peter Tait, Florence, Mistress of Max Gate (Sherborne: The Sundial Press, November 2011)

講演会：

2012年1月28日（土）に関西大学にて、鮎沢乗光氏による「『キャストブリッジの町長』における女性の状況——ルセッタの場合」があった。

会員名簿の追加訂正：

2011年度の会員名簿を下記のように修正してください。関係者には深くお詫び申し上げます。

1 ページ、[] 先生の住所：

誤 [] ⇒ 正 []

3 ページ、[] 先生の次に「[] 先生」の項目を追加：

[]

住所：[] []

電話：[] メール：[]

所属・身分：[]

5 ページ、[] 先生の箇所に次の項目を追加：

住所：[] []

電話 [] メール：[]

所属・身分：[]

編集後記

今時「（神の）見えざる手」を感じるなんて罷り通るであろうか。＜ヒロシマ・フクシマX「見えざる手」をも検証せよ＞（『朝日新聞』2月12日、朝刊）とのコラムが掲載されていた。負の連鎖による最悪の事態悪化に歯止めがかかったのは「幸運に恵まれた」からだと田坂広志氏（当時、内閣官房参与）が振り返り、また米ソが核戦争の瀬戸際まで対立したあのキューバ危機の事態収拾も「幸運のたまもの」だとロバート・マクナマラ氏（当時、米国防長官）が言い切ったとある。我々人類を震撼させた事象をこのような言葉で表現した文章にうなずいていいのだろうか。そう思う一方さまざまな分野で「人知では計り知れないもの」を感じる今日この頃である。

ご多忙のなか玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。

次号は9月発行、原稿の締切日は7月10日、論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。奮ってご寄稿ください。ハーディに関する著書、翻訳も編集者までご連絡ください。

尚、ゴシック体では長音が使用できないためにダッシュで代替でしたが、今回からタイトルと氏名も本文と同様に明朝体にして、長音とダッシュの区別をつけました。